

読書への^{いざな}誘い

河合文化教育研究所 所長 木村 敏

本を読むということには、どんな意味があるのだろうか。それは心に何をもたらすのだろうか。

たくさん本を読めば確かに知識は増える。また本を読むことによって今まで知らなかった未知の世界を垣間見することもできる。それはもちろん望ましいことだろう。しかし現在のネット社会の時代には、知識も瞬間的な体験もネットから手軽に得ることができるともいえる。だが、そこから得ることができるような断片的な知識や表層の経験をどれだけ数多く寄せ集めても、人生を豊かにしてくれる「教養」というようなものは身につかない。

教養とは、私たちの心を深く耕すものことである。ひとまずこう言ってもいいだろう。それを通して、幅広い視野や洞察力、深い思考力が生まれ、そこから私たちは「自分とは何か」、「生きることは何か」といった根源的な問題を考えることができるようになる。そうすると、この世界のうちに自分一人では存在することができないこと、自己が自己であるためには必ず他者の存在が必要になってくることもわかってくる。生きるとは、世界のうちで、互いに傷つきやすく脆い身体を基盤にしながら、他者とともに存在することである。その自覚のなかから、他者に対する想像力も生まれてくる。そのことが私たちの心をいっそう豊かなものにしていくのである。

では、教養を自分の中で培うには、つまり心を耕すにはどうしたらよいのだろうか。それは、良い本を読むことである。良い本とは、ある時代のある場所に生きた書き手が、彼が生きた時代の矛盾に向き合い格闘し、苦しみ考えながら自己の内的必然性に促されるようにして書いた本のことだと言ってもいいだろう。そうして書かれた本を、ゆっくり時間をかけて読む。そうすることによって読者は、いつの間にか書き手が生きている、その人だけの世界に入り込むことになる。本の書き手の生きているこうした世界こそが、一つひとつの知識や情報を、目に見えないかたちで背後からつなぎ、読む者の心に奥行きを与えてくれるような意味を発酵するのである。

ある人が歳月をかけてつくりあげたその人だけの世界に、何日もかけて持続的に住み着き、彼の体験や思考をその内側から自分の中に取り入れるということになると、やはり読書以外に手段はない。すぐれた書き手の世界を深く体験することで、読者の心は豊かになり、さまざまな感性が磨かれていく。こうしたことのすべてを教養だといってもいいかもしれない。

良い本の内部に入り込み、そこから世界と自分を捉え直すという貴重な経験を重ねてきた先輩たちが、塾生諸君にぜひ「この一冊」を読んでほしい、という願いを込めて作った冊子に、河合文化教育研究所が6年間にわたって発行してきた『わたしが選んだこの一冊』がある。これは、河合文化教育研究所の主任研究員や河合塾の講師の一人ひとりが、これまでの自分の人生の中で大きな衝撃を受けた特別な本を選び出し、短いながら熱い思いを込めて諸君に向けて書き綴ったものである。

ある時代にのっぴきならない思いを込めて書かれた著者の本を、別の時代に読んで心を動かされた推薦者が、新しい時代に生きる若い人にさらにその本を手渡していく。そうしたいわば「教養」のリレーを果たそうとしたのが、『わたしが選んだこの一冊』である。この冊子は、次第に多くの高校でも読まれるようになってきた。

本書は、この広がりの意味に思いを馳せ、その6冊の『わたしが選んだこの一冊』から、ぜひこれだけは読んでほしいというものを厳選して、新しい合本*にしたものである。

教養は受験には直接の役に立たないと思われるかもしれない。しかし教養は手持ちの知識を有機的につないで、知識の量よりもその質を高め、そして諸君の世界に対する認識力を掘り起こし、ひいては思考をも強靱に鍛えてくれる。それは深いところで、諸君を大きく変え、受験という人生の関門を突破していく力をもつけてくれる。

塾生の諸君に良質の読書をお勧めするのは、まさにそのためである。

*この合本は、2016年と2017年に、2分冊で発行される。